

クロスケの家における夜間生物調査；趣旨説明

横山 伸夫

(トトロのふるさと基金 調査部会)

要旨

狭山丘陵内に位置するクロスケの家（古民家）で夜間生物調査を実施した。調査内容は、ライトトラップ調査・シャーマントラップ調査・センサーカメラ調査の3つである。それぞれの調査において、虫類・小型哺乳類・中型哺乳類の出現状況が報告され、調査の継続が提唱された。

キーワード: 里山；里山景観；狭山丘陵；トトロのふるさと基金

はじめに

近年、里山の保全活動は注目を集めており、多くの調査が行われている。しかし、調査のほとんどは公園や保全区域等に集中しており、人の生活から切り離された状態にある地域を調査・研究の対象としたものが多い。里山の概念が人と自然との関わりを含むことから、人の生活の場をフィールドとした調査・研究を行うことは課題の一つである。

本調査では、公益財団法人トトロのふるさと基金が事務所として利用しているクロスケの家（古民家）とその敷地内の屋敷林や小川付近にてライトトラップ・シャーマントラップ・センサーカメラの調査を実施した。これは人の生活と関わりの深い場所での生き物の様子を記録することで新たな知見を得るとともに、狭山丘陵での生物データの蓄積を目的としたものである。

また、クロスケの家の裏側に流れる稲荷川付近では以前よりアライグマの足跡が見つかった。アライグマは特定外来生物に指定されており、外来生物法に基づき、防除・根絶が理想的であるとされている（環境省 2013）。昔ながらの里山景観の保全を目指すには生態系に影響を与える特定外来生物の扱いには注意が必要であり、状況を把握する必要がある。

調査地点概要

クロスケの家は、お茶農家の母屋として使われていた古民家を 2004 年に公益財団法人トトロのふるさと基金が取得したものである。2011 年 3 月に以前事務局を置いていた小手指の事務所からクロスケの家へと事務局を移転した。同年の 4 月より一般公開も行っており、2012 年 12 月には国の文化審議会から敷地内の主屋・茶工場・蔵の 3 点を国の登録有形文化財建造物に登録するよう答申があった。このクロスケの家がある所沢市三ヶ島地区は、江戸末期から狭山茶の主産地として栄えてきた。首都圏に残された緑の孤島・狭山丘陵のふもとに位置し、周辺には雑木林や茶畑といった昔ながらの里山風景が広がっている。敷地内にはモウソウチクやシラカシやヒマラヤスギなどによる屋敷林が存在する。また、敷地の北側に面して、砂川の支流にあたる稲荷川が西から東に向かって流れており、川の流れに沿って連続した緑が続いている。調査地の位置詳細は図 1 の通りである。



図1 クロスケの家(古民家)の位置

調査方法

調査は埼玉県所沢市三ヶ島三丁目のクロスケの家にて行った。2012年7月21日から22日にかけてライトトラップ、シャーメントラップによる調査を行い、センサーカメラによる調査を7月19日、21日、22日、7月27日～8月2日にかけて実施した。調査方法等の詳細については次項からの調査担当者の報告を参照していただきたい。

まとめ

それぞれの調査にて、虫類・小型哺乳類・中型哺乳類の存在が確認された。以前より、様々な生物がいることは視認されてはいたが、今回のように調査データとして記録できたことは価値のあることだと考えている。また、この夜間調査には地域の生徒も参加しており、教育的効果も期待できる。

今後はそれぞれの調査にて提唱されているように継続的なデータの蓄積を目指すとともに、生物の生態的な情報も取得していけるように努力していきたい。また、このような機会に合わせて教育的効果の実現を図っていきたい。

引用文献

環境省 (2013) 外来生物法 特定外来生物の解説 アライグマ

(<http://www.env.go.jp/nature/intro/1outline/list/L-ho-12.html>. 2013年1月12日アクセス).